

## 平安季世の文化と人生 (四)

櫻 井 秀

### 九、非階級思想とその性質

近代以前の日本思想界に非階級的——反階級的の意味ではない。——存在のあつたことは餘に明白なことである。言ふまでもなく歐米文化の影響によつて發生したものでもなんでもない。従て當然な現象として平安朝季世の生活——それ以前にも——にさういふ事實が存在し得たのは勿論である。續古事談に

河内前司重通ト云者、童ニラ西宮ニアケルニミチアシカリケル所ニ、アユミノ板ヲ三四枚バカリシキ渡シタリケルニ、朱雀院ノカタヨリ、シラヒゲナル翁ノ、モトドリハナチタル裾ヲトリテコノ板ヲ渡ラントシケルヲ、コノ重通ガオサナクテ、イタノ端ヲフミテ動シタリケレバ此翁ヒレフシニケリ、朱雀院ノ方ヨリ藏人二人走リキテ手ヲ引キテ歸リニケリ、後ニキケバ冷

泉院ノオハツマシケル也。(1)

こんな話が出てゐる。上下の隔絶といふことを貴族文化時代の屬性としてばかり考へる者にとつては、信じ得きうもない記載である。しかし、此種の寛大な世態が本書撰者の夢幻的存在だつたとは思はれない。けれども、中古以來の純日本的な非階級思想は今日所謂「平民主義」とか民衆化とかいふことと著しくかはつた半面をも持つてゐたのである。

當時に於ける下級人の勢力は想像以上に偉大なものがあつた。「貴人弱、民強」(2)とか「末代事下不從上」(3)とかいふことは昔人の汎ねく感じて居つたことである。それが官制上にあらはれては

近代攝錄其威輕、諸卿其心猛(4)

かういふ結果となるし、社會的には武家の勃興となり、また庶民に對する上流の無關心もあり得ない状態であつた。顯廣王記に

凡末代之法年中神事佛事皆以如虛……下輕上、上恐下、只武威顯官重職併在武家諸國又然也(5)

かういふ危機であり、近臣の中でも次のやうな直言を敢てする人々が出た位である。

五條堀川後院町可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>造宮<sub>一</sub>而堀川材木商人依爲陣中可不通、此條可計奏者、申云先天子之政、以無人愁爲先(6)

本例などかなり強く民衆的な色彩があつて、現代人の古代思潮觀を訂正せしめずには置かぬやうに見える。こんな時世にもかかはらず、貴人等はその持ち傳へた自然な文化を葬り去らうとは考へなかつた。民衆も彼等と何等隔絶するところなしに接觸しながら、その文化を味ひ得るやうになつてゐたのである。宇治拾遺物語にの

今はむかし、かくし題をいみじう興せさせ給けるみかとの、ひちりきをよませられけるに……

木樵る童のあかつき山へ行とていひける……ひちりきをよませ給なるを人のえよみ給はさんなるわらはこそよみたれといひければ、ぐしてゆく童……さまにも似ずいまくしといひければ、めぐりくるはな／＼ごとに櫻花

いくたひちりき人にとはゞや

といひたりけるさまにもにず、おもひかけずぞ

かういふ一話がある。類似な例證は本書をはじめこの他にもあつて、當時上下の生活と交渉にはかなり親しみの深い半面があつたことを想はしめる。貞丈も夙に、

大内裏の御垣の内、宮中の風俗など……何事も大やうに……大事は法式たちて猥ならず、小事には拘らず、せはしく物とかめする事なく、諸人の風情のびらかにしてたのしげなり……物こひの尼法師禁内に入りて女房の局の前にたちて物こふ事なともありし、何事もせまく小さから

ずして大やうにゆるやかなりし様みえたり<sup>(8)</sup>

右のやうな所見を洩して居た。

#### 註

- (1) 續古事談卷一、王道后宮
- (2) 長秋記、大治四年三月廿一日條
- (3) 玉葉、承安三年二月二日條
- (4) 庭槐抄、治承二年三月廿二日條
- (5) 同書、治承元年四月廿八日條
- (6) 玉葉、治承四年正月廿四日條
- (7) 同書、卷十二
- (8) 安齋隨筆卷十

#### 十、貴族文化の使命とその頽廢

一般民衆が少なくも或る程度に於て貴族文化の特性を味ひ得たこと、及それが他の方面——即ち社會的或は經濟的因子から來た下廻上の風潮——にまで少なからず影響し、上流に對する下級人の心理を融和せしめたことは疑ひを容れぬのである。けれども、平安中世の末から季世へかけては、

貴族の一部にはたゞ經濟的方面だけからでない多くの事情から、頽廢的な解體的な行動に出るものが少なからずあつたことは言ふまでもないのである。彼等の頽廢的傾向は各種の方面に認められるけれども、たゞその二三だけをあげて見やう。學藝の方面からいへば、こんな記載が中古記に残つてゐる。

近日自陸奥國進<sup>ニ</sup>國解<sup>ニ</sup>……欲<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>陣定<sup>ニ</sup>處、參議中無<sup>ニ</sup>執筆人<sup>ニ</sup>、是左大弁被<sup>ニ</sup>籠<sup>ニ</sup>院御精進、右大弁俄所勞……此外近代八座之中全無<sup>ニ</sup>屬文人<sup>ニ</sup>也<sup>（一）</sup>

堀河帝は御學藝ともにすぐれさせられた英主であるが、その御代に於てさへかういふ傾向があつたのである。文道出身の藏人で連句の出來ぬものがあつたり<sup>（二）</sup>するほど、此種の風潮は一般化されて、鎌倉初世になると「不讀漢字之人也」<sup>（三）</sup>「不知漢字勿論」<sup>（四）</sup>など批評される廷臣が續出した。これ等の場合に於ける「漢字を知らぬ」の意味は、外國文籍の知識がないことであつて、必しも「文盲」の義ではなからうけれども、とにかく貴族文化のかなり急速に没落しつつあつたことを想はしめる。貴族階級の精神的解體を促した因子は一二にとどまらない。しかし、この一は國家財政の不良、私經濟狀態の變調から來た空虚な生活の保證から自然に動きそめた金力の希求、富豪との握手——かういふ事實が更にまた多くの病的現象を繼續的に生んで行つたことである。——勿論、他の半面には奢侈から金婚へといふやうな型式の過程を示した者も少なくなかつた。閑院大將朝光は季世か

らいへば、前時代の人であるけれども、かういふ方面での先覺者らしく見える。大鏡に彼の行動を傳へて、

いみじかりし御よおほえにて……御まじらひのほどなくこと、ほかに、さらめき給き、やなくひの水晶のほすも此殿のおもひよりしいで給へるなり……

とある。しかし、かういふ風に華やかな生活をつづげるためには、次に示されたやうな行動をも取てしなければならなかつた。

びはの大納言のぶみつ卿のうせ給にしのち、そのうへのとし、老て、かたちなどわろくおはしけるにやことなる事ものきこえ給はざりしをぞすみ給し、とくにつき給つるとぞ世人申し、さていのおほえもおとり給にしぞかし<sup>（五）</sup>

これ等の派は前のそれよりも悪性な存在である。金權をのみ追ふて走る貴族が少なくなひやうになつてから、彼等の階級に教養の方面では、殆んど一顧を値せぬの者多くなりかけたのも自然であり、かくして貴族文化は昔のやうな魅力を發揮しがたくなりかけたのである。しかし、その特殊獨自の傳統はとにかく近代日本の末期——即ち江戸季世まで維持された。近代に於ける貴族文化の使命は編を改めて説かうと思ふ。（完）

註

平安季世の文化と人生 (櫻井 秀)

- (1) 寛治六年六月三日條
- (2) 續古事談卷一に「堀河院ノ御時ノ遣遙ニ序代カクベキ人ナカリケリ、文業藏人國資無才ノ者ニテ人ユルサズ……主上……人々ニ連句イハセ給クルニ、國資ニ末句イヘト被仰ケレバ、今日ワタクシノ衰日也……ト申ケレバ、……君ヲアザムキ申、連句イハヌホドノ者、イカデカ博士ニナルベキト被仰ケル」とある。
- (3) 玉葉、建久三年五月三日條
- (4) 玉葉、文治三年九月廿七日條
- (5) 大鏡卷五、兼通傳による

附記

本編に於て記さうとしたところは、かなり廣汎なものであつた。けれども、餘に長くなつたし、他にも書きたいところがあるから、これまでにして置く。

(昭和四、五、廿六)